

清寧天皇 河内坂門原陵飛地い号 土留柵改修その他整備工事に伴う立会調査

はじめに

清寧天皇河内坂門原陵飛地い号(以下、「本飛地」という)は、大阪府羽曳野市西浦1丁目に所在する現状主軸長45mの前方後円墳である。本飛地より府道をはさんで西側には、主軸をほぼ同じくして、清寧天皇河内坂門原陵(以下、「清寧天皇陵」という)が存在する。本飛地の遺跡名は、小白髮山古墳である。

標記の立会調査は、平成26年度に実施した本飛地北側の土留柵およびフェンスの改修工事の際に、施工地における遺構・遺物の有無を確認することを目的として、平成27年2月3日から20日までおこなった。ここでは立会調査の内容について報告する。

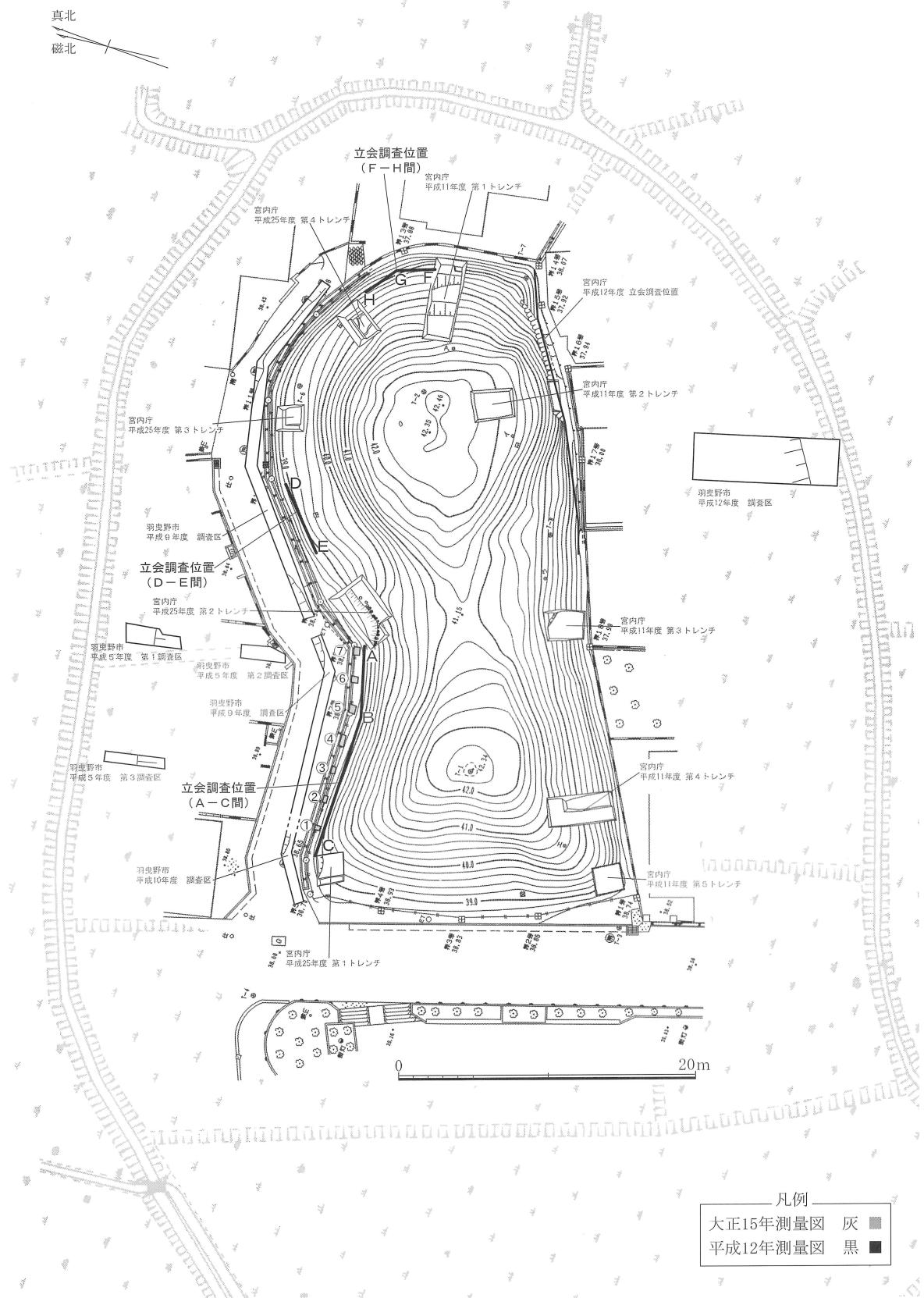
なお、本報告のうち陵墓課職員が立ち会ったAからC区間以外は、実際に現地で工事に立ち会った古市陵墓監区事務所が作成した報告書の内容を、本紀要掲載のため陵墓課で編集したものである。

1 立会地点の状況

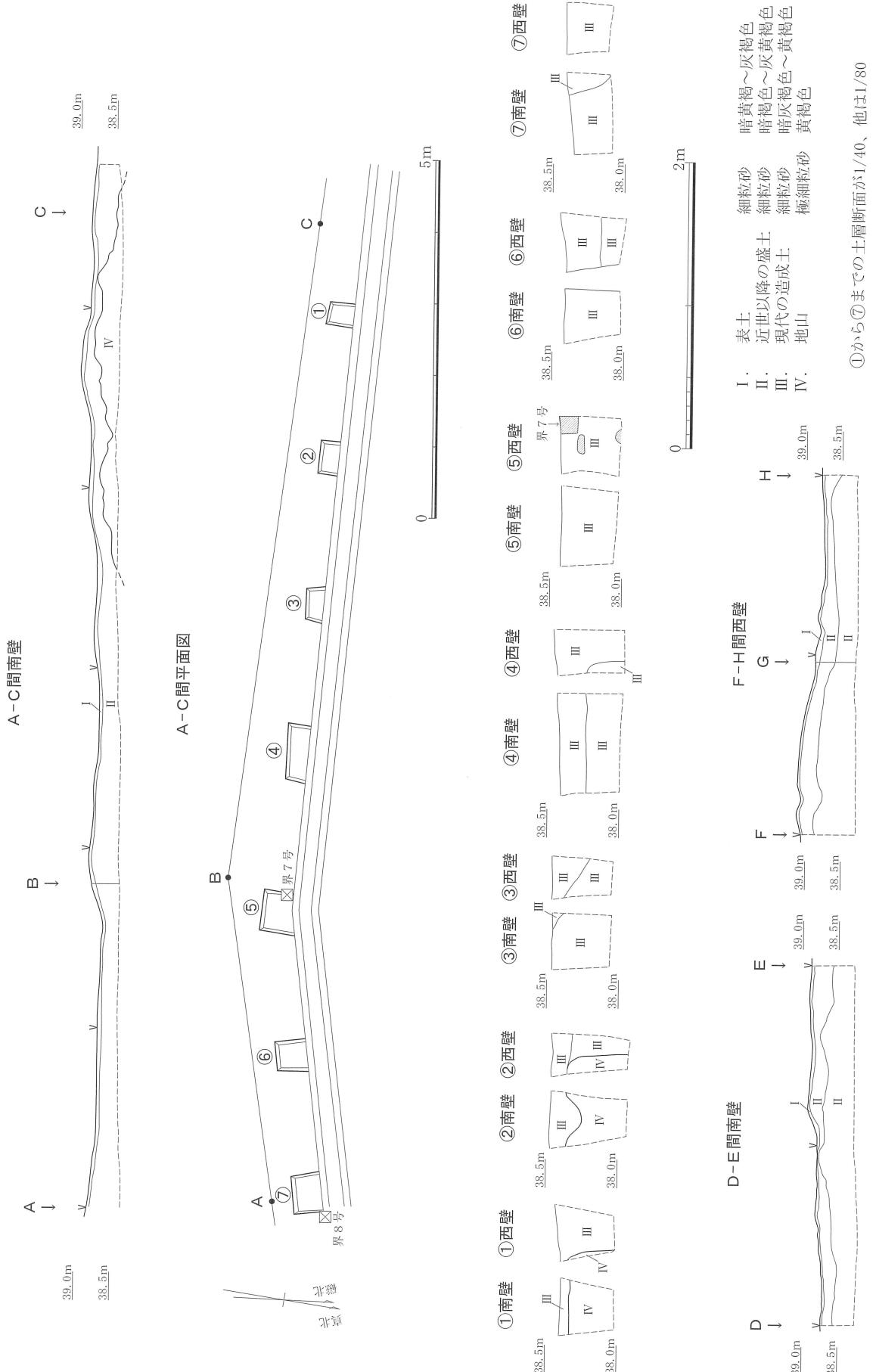
土層 立会調査地点における土層は、表土(I)、近世以降の盛土(II)、現代の造成土(III)、地山(IV)が確認された。II層については、平成25年度の事前調査(1)で確認されたII層と同じ土層と考えられる。またIII層については、本飛地外周のフェンスもしくは側溝を設置した際の造成土である。



第59図 河内坂門原陵飛地い号 周辺陵墓位置図 (1/20,000)



第60図 河内坂門原陵飛地い号 調査地位置図 (1/400)



AからC区間(図版19・20) 本飛地前方部北側の調査地点である。南壁の土層は、表土、近世以降の盛土、地山を確認した。地山は調査地西側の標高約38.8mで検出した。また、AからC間では、フェンス基礎据付穴①から⑦の土層を精査し、現代の造成土、地山を確認した。遺構は検出されなかったが、近世以降の盛土より円筒埴輪片、形象埴輪片が出土した。

DからE区間 本飛地後円部北側の調査地点である。南壁の土層は、表土、近世以降の盛土を確認した。遺構、遺物は検出されなかった。

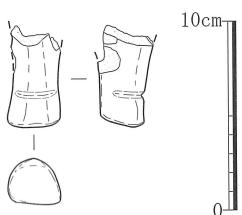
FからH区間 本飛地後円部東側の調査地点である。西壁の土層は、表土、近世以降の盛土を確認した。遺構、遺物は検出されなかった。

2 出土遺物

立会調査で出土した遺物は31点で、コンテナ1箱分である。また、出土遺物は1点の形象埴輪片以外は、全て円筒埴輪である。円筒埴輪については、小片であることから、朝顔形埴輪等との区別が困難なため、

ここでは便宜的に一括して円筒埴輪としている。円筒埴輪、形象埴輪ともに黒斑が残るものは見られなかった。

ここでは、墳丘北側のくびれ部、界7号から界8号までの区間で、近世以降の盛土より出土した形象埴輪1片について報告する。この形象埴輪は小片のため、何を象ったものかは不明である。残存長5.4cm、残存幅2.8cmで、表面はナデ調整を施す。色調は淡褐色で、焼成は良好である。破面には丸い端部に付けられた際の窪みが残る。



第62図 河内坂門原陵飛地い号
出土品実測図 形象埴輪 (1/4)

3まとめ

今回の整備工事は、平成25年度におこなった事前調査の成果をふまえ、遺構への影響が無いよう配慮した内容であったため、立会調査で遺構は確認されず、予定通り施工された。AからC区間の西側では、地山が標高約38.8mと他よりも高い位置で検出されたが、平成25年度事前調査の第1トレンチでも標高約38.5mと他よりも高い位置で地山が検出された。ゆえに、本飛地の前方部は、そのほとんどが盛土というわけではなく、高い地山をある程度整形し、そこに盛土することで造られたと考えられる。

(濱田武典・笹尾佳裕・玉野裕弥・横田真吾)

註

- (1) 横田真吾「清寧天皇 河内坂門原陵飛地い号土留柵改修その他整備工事に伴う事前調査」『書陵部紀要』第66号〔陵墓篇〕、
宮内庁書陵部、2015年。



1 調査地(A-C間)全景(北西から)



2 調査地(A-C間)全景(西から 奥に清寧天皇陵)



1 調査地(A-C間)①西壁(東から)



2 調査地(A-C間)②西壁(東から)



3 調査地(A-C間)③西壁(東から)



4 調査地(A-C間)④西壁(東から)



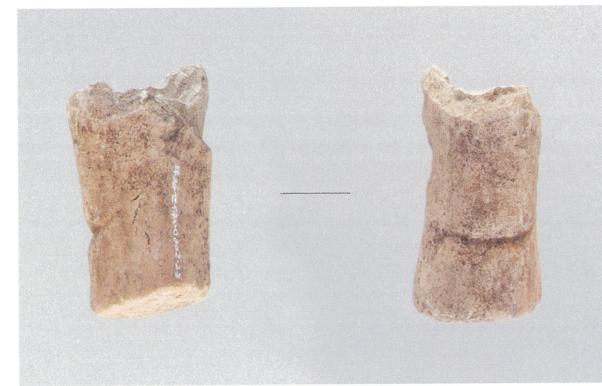
5 調査地(A-C間)⑤西壁(東から)



6 調査地(A-C間)⑥西壁(東から)



7 調査地(A-C間)⑦西壁(東から)



8 形象埴輪